

大友宗麟の実像



【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地を国際文化都市として繁栄させた大友宗麟公をシリーズで紹介する「大友宗麟の実像」。今回はその最終回。】



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

最終回

宗麟を誇りに

宗麟は、「進取※」の気性に富んだ人物であり、「能」や「茶道」^{けま}「蹴鞠」といった日本の伝統文化をしっかりと継承しながらも、国外の文化を積極的に取り入れました。その結果、全国に先駆けて西洋と東洋の出会いが演出され、豊後府内は、南蛮文化の薫る異国情緒あふれるまちとして発展したのです。

歴史上で「戦国大名」と呼ばれる枠組みとは異なり、そのダイナミックでグローバルな活動により、アジアのみならずヨーロッパにおいても高く評価された宗麟。学識経験者や市民代表からなる「大友宗麟プロモーション検討委員会」は、今年の3月に、宗麟を戦国一の『NANBAN』^{なんばん}大名と位置付け、市の顔として全国に情報発信する方策について検討する必要性を求めました。

人にはさまざまな一面があり、歴史上の人物に限らず三者三様の評価があるのも事実です。宗麟を学ぶうえで、歴史資料を丹念にひも解くとともに、発掘調査で発見される遺跡や遺物から発せられる「地中からのメッセージ」

に注意深く耳を傾け、新たな宗麟の実像に迫っていく必要があります。

そして、宗麟を市民の誇りとして後世にしっかりと伝えていくことが、現代に生きるわたしたちに求められているのではないのでしょうか。

※進取とは、自ら進んで物事に取り組むこと



【明ける海】1966(昭和41)年 高山辰雄作

大分文化会館の緞帳(どんちょう)の原画として、大友宗麟時代の豊後府内をイメージして描いた作品。別府湾に停泊する南蛮船やヨーロッパの宣教師をはじめ、さまざまな国の人々・動物などが描かれている。

お問い合わせ 文化財課 ☎537-5639